

ピエール・ティヤール・ド・シャルダンと賀川豊彦

——宇宙的宗教思想をめぐって——

岸 英 司

ピエール・ティヤール・ド・シャルダン（二八八一—一九五五）と賀川豊彦（一八八八一—一九六〇）は同時代人であるが、賀川の著作の中にはティヤールの名は出てこない故に、二人は生涯の間互いに知ることはなかったと考えられる。故に、両者の思想に何らかの類似性があるとした場合、ティヤールが賀川に影響を与えたとは考えられない。

よく知られているように、ティヤールはカトリックのイエズス会司祭、地球古生物学者であり、賀川はプロテスタントの牧師、社会運動家であった。私が両者の宗教思想の類似に気づき、その素描を公けにしたのは一九七〇年のことであり、其後も今日迄両者の宗教思想についての比較研究を公けにしてきた。⁽¹⁾

ティヤールの進化論的宇宙的宗教思想は彼の著作集をはじめいくつかの研究書の翻訳等によって日本でもかなり知られるように

なったが、賀川がティヤールの思想家であることは今尚多くの人の認める所ではないと思われる。賀川生誕百年の年に当り、ティヤールの宇宙的宗教思想を素描し、これに対応する賀川の宗教思想における宇宙性について考えたい。

一、ティヤールの宗教思想における宇宙性

疑いもなくティヤールの思想と生涯を知る第一歩はC・キエエノの「ティヤールの生涯1・2」(Pierre Teilhard de Chardin, Dion, 1958)であろう。⁽²⁾

ティヤールは一八八一年五月一日、クレルモン、フェラン市の西方七キロ、オルシノ村字サルスナで、信仰深い家庭に生まれ、敬虔な母親から信仰、特にカトリック教会における「イエズスの聖心への信心」を受け継ぎ、幼時から永遠を求め、五歳か六歳の

時には髪の毛が火で焼け、また七歳の時、彼の大事にしていた鉄のねじ針に錆を見つけて、世界の偶有性に打ちひしがれる。彼の「変化しないもの」、「不滅なもの」への憧れは彼を岩石に向かわせる。岩石は容易に崩壊しないものであって、岩石との出会いこそ後の地球古生物学者を形成する。高等学校時代に彼は岩石に夢中になり、さらにジャージ島での哲学課程の時代には島の地質の研究に興味を示し、カイロでの教師生活中彼は中東砂漠と出合う。彼は地質学者、地球古生物学者として地球の過去の研究者であったが、ある時から彼は地球と宇宙の未来の研究者となる。進化論は彼にとって単なる仮説ではなく、自明の事実であって、彼は静的宇宙 (Cosmos) を否定し、動的宇宙、すなわち生成する宇宙 (Cosmogénesis) を主張した。さらに進化し生成する宇宙とキリストの受肉 (Incarnation) によって祝福され聖化された宇宙は合体し、進化の究極、オメガ点はキリストと同一化され、キリストは宇宙のキリスト (Christ Cosmique) となる。彼のこの進化論的宇宙的宗教思想は神学者達からそのキリスト教的正当性が疑われ、幾多の批判をまねき、生涯にわたって、研究と発表は困難となる彼の良き理解者であった、J・ハックスリも指摘するように彼の「現象学」は「科学」を超えており、彼の言葉で言えば、「超—自然学」、「人類生成学」、「宇宙神秘学」である。彼の方法論はあくまで科学的でありながら、彼の宇宙的ヴィジョンは大胆に宗教と科学を結ぶ「超—科学」であり、「神秘学」であり、「芸術」で

ある。

C・キュエノによれば、彼は一九三四年四月二十九日の手紙の中で、「実際には超自然学、あるいは超生物学ともいうべき別種の形而上学を認めようとしています」と述べ、また一九三六年十月十一日の手紙の中では、「すなわち物質も精神もどちらも一貫性のある均質的な同一の世界観に包含されるような超自然学を構築することです」と述べている(『ティヤールの生涯』全集別巻10 b. 一六頁)。このティヤールの言葉は彼の不朽の著作「現象としての人間」(Le Phénomène humain (1938-1940)) において実現する。この書は周知のように科学的でありながら科学を超える。宇宙には物質と精神といった別種のもが存在するのではなく、物質と精神といった現象が存在するに過ぎない。グラフに表わせば一本の線となる。進化の流れは、物質から生命、生命から意識すなわちヒト、さらに超—意識化、超—ヒト化する。

「意識の集中度はその裏地となる物質化合物の単純性と反比例して変化するといえる。あるいはまた、意識は、その裏地となる物質の組織体がより豊かになり、よりよく組織されていくにつれて、いっそう完成したものになる。精神的完全性(すなわち意識の集中度)と物質的統一(すなわち複雑性)とは同一現象の結合された二つの面あるいは二つの部分に外ならない」(「現象としての人間」著作集1、五六頁)。ティヤールのこの考察こそ、物質と精神の連続性を基礎づけるものである。ティヤールはこれを「複

雑性—意識の宇宙的法則」(La Loi Cosmique de Complexité-Conscience)と名づけ、「宇宙の構造軌道は精神作用において収斂する」とする(前掲書、五七頁)。複雑性—意識の法則によって、物質は生命化し、生命は意識化する。「生命とは物質の一つの付帯現象である。それはまさに、思考が生命の一つの付帯現象であるようなものである」(『自然における人間の位置』(L'Énergie humaine) 著作集²、一七—一八頁)。生命とは「複雑化した物質の特異的効果」(前掲書、二四—二五頁)であり、意識は「宇宙を構成するすべての粒子体に共通の普遍的な特性」であるとされる(『人間の未来』(Les Directions de l'Avenir) 著作集⁷、一六〇頁)。ティヤールによれば、この複雑化は一定方向へ向うものであって、それ故、ティヤールは定向進化論者である。「定向進化なくしては、生命は単に広がるだけであつただろう。定向進化によって、生命の上昇が否応なしに行われるのである」(『現象としての人間』一八頁)。

物質から生命、生命から意識—ヒトにまで到達した進化の特質とは何であろうか。ティヤールによれば、それはヒトの「思考力」である。人間の本質は「自己の知ることを知る」—「自己省察の力」である。アリストテレスの省察的動物であるにとどまらず、知ることを知る二次函数的意識をもった存在—これが人間である(『ヒトの出現』著作集³、三二二頁及び『人間の未来』一六四頁参照)。

ティヤールはスコラ神学者ではなく、むしろ科学者であつて、超科学である「宇宙自然学」の創始者でありながら、人間の本质

を「省察的意識」(La Conscience Réflexive) においたことによつて、プロティノスからプロクロスに至るギリシア哲学の人間理解「自己自身に帰ることのできるもの」から、さらにトマス・アクィナスにおいて、靈魂不滅の根拠のひとつとされた「知性は知性自身を認識する」(intellectus intelligit se) (Sent. Lib II, dis. 19, a. 2) という人間理解の伝統につながっていると言うことができる。

ヒトは進化の究極ではなく、いま尚進化の途中にある。進化の究極はオメガ点とよばれ、このオメガ点は存在し、キリストと同一化される。ティヤールによれば、オメガ点が存在しなければオメガ点への意欲は存在し得ず、キリストはオメガ点である故に、すべてのものの中に到達可能な必然的存在として存在し、キリストは進化をつかさどる者となる(『科学とキリスト』(Science et Christ) 著作集⁹、八三頁、二三〇頁参照)。彼のこの主張は科学と宗教を結び壮大なヴィジョンであるが、科学者からはそこまでついて行けないという批判、また神学者からは彼のキリスト論の正統性を疑わしめる原因ともなった。しかし彼はこれこそキリスト教の特質—宇宙性であり、自己の宇宙的宗教思想の正統性を証しするものとして、ヨハネとパウロ、特にパウロの言葉を引用する。

「万物は彼において存在し」(コロサイの一七)、「万物はキリストにおいて満たされ」(コロサイの一〇、エフェソの九参照)。
その結果、「すべてにおいてすべてであるキリストだけがおいで

になる」(「ロサイ三の二」)

彼のオメガ点とキリストとの同一化によって、すべての人間のすべての行動は宗教的意味をもつに至るのである。なぜなら、進化による自然的世界の収斂とキリストによる宇宙の完成が別のものでないとすれば、すべての人間のすべての努力はキリストのため、また人間が受けとるすべての事はキリストによるものとなる(Quidquid peiatur, Christum peiatur; Quidquid agimus, Christum agimus. "Forma Christi" 参照)。

すべての人間のすべての努力は宇宙生成、キリスト生成への参与に外ならない。

宇宙には目的があり、その目的が宇宙意識として現われ働きかけてくる。ティヤールは宇宙の奥深い所にある超越的力を「宇宙意識」(La Conscience Cosmique)と云ふ。

「私はせつせとさがし求めたあげく全体を発見したのではない。むしろ全体のほうが、一種の『宇宙的意识』をとおして、私のまえに現われのしかかってきたのだ」(『科学とキリスト』七〇頁)。

ティヤールにおいて宗教とはこの宇宙意識への目ざめに外ならない。

進化を主張したティヤールにおいて創造(Creation)とは何であるか。ティヤールは創造を否定せず、創造に特別の意味を与えた。ティヤールの独創性は進化と創造を結びつけた事である。彼

によれば、創造とは進化する宇宙の中での結合である「創造的結合」(Union creative)に外ならない。それは無である多様性が「一」に統合されることである。神の創造はまさに進化を通してなされるのであるが、この創造的結合こそはまたプレロマ化(La Pléromisation)に外ならない。

進化とは時間と空間における創造のプロセスであって、キリストは進化の頂上、中心である。

「彼はアルファであると同時にオメガであり、第一原因であると同時に究極であり、土台石であると同時に要石であり、充満であると同時に充溢させるものです」(『科学とキリスト』五七一―五八頁)。

創造的結合―プレロマ化は結局「結合に向う変容」(une transformation unitive)に外ならない。それはあらゆるものの量的充満であり質的完成である。被造物は神に何ら完全性を付け加えることなく、しかも神である一者が被造物である多と融合することである(『神のくに』(Le Milieu divin) 著作集5、一一―五頁参照)。彼のオプティミスムは宇宙的歓喜をもたらす。被造物のもつ完全性と神の完全性の融合、プレロマの理解はパウロ的なものであり、神学的に誤っていないと言ふことができる。彼の主張は上昇神秘主義と言えよう。

以上ティヤールの宗教思想における宇宙性の考察によって、彼が科学と宗教、進化論と神秘主義を結びつけた人であることが明

らかである。ティヤールはキリストにおいて、科学思想と神秘思想の結合を予測したが（C・キエノ『ティヤールの生涯』三二〇頁参照、彼はこれを「神秘の眞の科学」、「神秘神学」と呼び、「芸術」と呼んだのである。

「いっさいをたらぬキリストの科学、すなわち神秘の眞の科学のみが唯一の課題であるという確信が、内的にますます強まるのを感じます」（『旅の手紙』著作集4、五四頁）。

「ともあれ神秘神学は偉大な科学であり、偉大な芸術であり、人間の活動の他の形式によって蓄積された富を綜合しうる唯一の力です」（前掲書、五五頁）。

二、賀川豊彦の宗教思想における宇宙性

賀川豊彦は一八八八年七月十日神戸で生れ、郷里の徳島の田舎で育った。彼は終生自然を讃える「自然詩人」であった。⁽⁴⁾幼年時代よりの自然への興味はやがて彼の科学への関心として成長したように思われる。彼はティヤールのような科学者ではなかったが、科学の愛好者であった。戦後『文芸春秋』誌の特集「日本の一〇〇人」に現われた賀川の写真は幾多の洋書を背景に、大部の地質学の英語の書物に手をおいたものであった。今日賀川豊彦記念・松沢資料館には彼が生前集めた鉱石標本が保管されていて、このことは彼の岩石、地質学への特別の関心を示すものと言える。⁽⁵⁾彼が医学についても深い関心を持っていたことには、日野原重明氏

の興味深い証言がある。⁽⁶⁾キリスト教に入信してから、神学校に学んだ彼は、プリンストン大学で古生物学を学び、進化論を受け入れ、生涯の早い時期から科学と宗教の調和を心がける。彼が進化論を受け入れた結果、その影響は彼の信仰をはじめ、彼の思想と活動の全分野に及んでいる。彼の講演集である一九三〇年の『神に就ての瞑想』は当時の宗教書としてはめずらしく、進化論と創造論、科学と宗教の問題を論じている。彼は科学と宗教が衝突すると考えられる理由として、一、信仰と知識の衝突、二、信仰と知識が局部的のものとなり、相互に交渉をもたないこと、三、両者の態度及び方式のちがいが、すなわち宗教は過去へ、科学は未来へといった傾向等をあげている。賀川にとって生命と物質、演繹論と帰納論、目的論と機械論とは矛盾せず、宗教と科学の調和する理由として、両者に合目的性のあることを主張し、その鍵は進化を認めることであるとされた（『神に就ての瞑想』全集3、一〇—二四頁参照）。

賀川は晩年『宇宙の目的』全集13（一九五〇）において、宇宙における進化を認め、生成する宇宙、人格化する宇宙のヴィジョンを公けにした。彼の宇宙思想の集大成ともいべきこの著作は日本の神学者、思想家からは評価されなかったが、これにはいくつもの理由が考えられる。一、この著作には種々の科学的論述はあるものの科学の書ではなく、「超—科学」の宇宙的ヴィジョンであること、二、多くの読者は賀川が持っていた程の自然科学の知

識を持たないこと、三、宇宙の進化論的理解への関心に欠けること等である。彼の宇宙思想は「進化論的創造論」と言うべきであつて、彼はティヤールと同じく定向進化論者である。彼は進化の法則を「選択の複雑性」においている。物質は複雑性を増し、集中しなければ生命化しないことはティヤールの主張した所であるが、賀川によれば、宇宙には自然選択律が存在し、物質は生命を作り出すという定向性を持っているのである（前掲書、二九八頁参照）。彼は「法則の集中体としての生命」について語っている。

「有機化学の世界において、固体、液体、気体、磁力、電気、放射能の六つが常温において容易に一点に集中しうる。この可能性が約束として与えられたから生命体が可能になったのである」（前掲書、三六七頁）。

賀川によれば、合目的性の存在が、物質から生命を一度限り誕生させたものであつて、それは自然環境の適応性であり、偶然ではなく、「先験的な目的性」である。この彼の主張によつて、ティヤールにおいてと同じく、超自然は排除されていないと考えるべきである。ティヤールの「複雑性—意識の法則」に対応するものは賀川における「選択の複雑性—選択律」(Selection Principle)である。

「選択の発生は、あることの『始』であり、『選択』そのものが変化と決定のある約束をもつて組み合わせたものである。物理的選択から化学的選択へと進み、さらに、それらが生命の世界に

発展すると、選択性が一層複雑になる。すべての物理的選択の上に、生化学的選択が加わり、さらに生理的選択性を加重しなければ、生命現象は出現しないのである」（前掲書、二九九頁）。賀川によれば「選択の複雑性」こそが物質から生命、生命から意識、心に到達せしめる原理である。先験選択による先験選択性の直観というものは、人間の自意識による自己認識、彼の表現では「我」なる「目的格」存在の自意識に到達する先験選択の終極への到達」（前掲書、四四一—四四七頁参照）と言われている。彼は「我」の世界は、それ自身が「主体」であり、それ自身が「目的格」をもつ認識の「客体」である」（前掲書、四四七頁）と言っているが、これは自意識が主体でありながら客體、目的格存在ということとティヤールの言う省察的自己を意味していると解せられる。

ティヤールにおいて、宇宙は人格化する宇宙であり、その究極は人格であるとされたが、賀川もまた宇宙進化の頂点は人格であると言ふ。それ故、両者はともに宇宙人格主義者である。賀川は『宇宙的目的』の三二年前すでに次のように語っている。

「進化があると云ふものは、神があると云はねばならぬ。なぜならば、ただひとり神は進化の力そのものであるからである。人格と云ふ不思議な内部実在は不変と変化の両極端を統一し、成長と法則、経験と記憶と、内在と超越を統合する。

人格は宇宙進化の最後の頂点である」（『愛の科学』全集7、二〇八頁）。

賀川において、オメガであるキリストと言う言葉は見当らない。しかし、彼において、キリストは宇宙的存在者であり、宇宙の回復者、完成者である（『永遠の再生力』全集4、三五八頁参照）。ティヤールにおいてはオメガ点とキリストが同一化されたことによつて、人間のすべての行動が宇宙的拡がりを持つに至つたが、賀川においても、人間の行動は宇宙的拡がりを持ち、彼は全宇宙の連帯意識を呼びかける。「創造性、保存性、修繕性を、科学において、道徳において、芸術において、即ち、真、善、美において個人的に完成するのみならず、社会的に宇宙的に完成すべきものである。……もつともっと大きい宇宙連帯意識をもたなければならぬ。そして人類だけでは足りない。動物、植物をも含めた全宇宙の連帯意識が発達しないと人類は進歩できない」（前掲書、三五三頁）。

賀川はティヤールと同じく宇宙に目的を認める宇宙目的論者である。「自然界にはぐくまれ生まれ出た生命は、いまや生命の内部に創作意欲を持つ合目的性の『心』として誕生した。そしてこの『心』を持つ合目的性が、『宇宙目的』の方向性を指向するものであると断定できないであろうか？ 私は宇宙の包蔵する機構が、多項式、高次元の適合性の組み立てによつて、適合性の頂点である合目的性の『心』を生み出した以上、宇宙の根底に、合目的性の本質としての『心』のあることを肯定してよいと思う」（『宇宙の目的』二九五頁）。彼はすでに一九三六年の『生命宗教と

生命芸術』の中で、この論理―すなわち、人間が人格、心なら、人間を生み出したこの自然、宇宙も心つまり人格的自然、人格的宇宙であるという主張をしている。賀川によれば「一、宇宙には目的がある。二、宇宙の目的は『生命』の方向に向いている。三、『生命』の目的は『心』（意識）のほうに向いている。四、個性の心は社会的組み立てのほうに向いている。五、その組み立ての社会的『心』は歴史的進化発展と宇宙意識の覚醒の途上にある。六、それは宇宙の創造進化を可能ならしめる精神の助力を待つ方向に向いている」（前掲書、四五三頁）のである。

ティヤールの創造論は創造的結合であったが、賀川はいわば「無」である多様性が、創造という絶対性によつて総合され、「一元」のものとなるところに真の創造があるとしたのである（前掲書、四二四頁参照）。

ティヤールにおいて「創造的結合」と「受肉」と「贖罪」は結合していたが、賀川において、キリストの受肉による再創造、再進化、修繕はキリストの贖罪であり、多様なもの一元化―ティヤールのいうプレロマ化に外ならないのである。

ティヤールは地球の全未来を未来への人間の信仰の目ざめと共感（*la sympathie*）において、賀川は人間の宇宙意識への目ざめと宇宙的連帯においてなのである。

ティヤールは「現象としての人間」の中で、自己の宇宙的ヴィジョンを「宇宙劇」（*le drame cosmique*）と呼んだが、賀川もま

た彼の『宇宙の目的』の中で、自己の宇宙的ヴィジョンを「宇宙の一大演出」、「宇宙の演出せんとする芝居」と呼んだのである。賀川にとってそれは「宇宙芸術の味わい方」（前掲書、二九一頁）に外ならなかった。

ティヤールは『現象としての人間』の中で、ただ「見る、こと」に徹し、賀川もまた『宇宙の目的』の中で宇宙劇の観客であり役者であろうとしたのである。

ティヤールも賀川も人間の宇宙意識の目ざめこそ、進化をおしすすめるものとしたが、また同時に宇宙意識の働きかけ、超自然は排除しなかった。二人の立場はいわば超自然に開かれた意識目的論と言うことができよう。

賀川はティヤールと同じく地球と宇宙の未来に楽観的である。

「私は世界苦の存在を否定するものではない。しかし、その世界苦のみをみて、宇宙の美しい方面、またその宇宙悪を補修せんとしている宇宙意志の動いていることを否定することは許されないことと思う」（前掲書、四五二頁）。

賀川はティヤールと同じく「宇宙感覚」の宗教思想家である。

彼にとって「科学」は「理念の宗教」、「天啓の一部」に外ならず、「科学」は遂に「芸術」であり「愛」に外ならない。

「科学は私の魂の芸術である。それは神が私の為に啓示してくれる真理の芸術でもある。科学によって、私はどれほど強く、宇宙意志によって愛せられてゐるかを知る。新しき生命

宗教に取っては『科学』はそれ自身が最も大きな慰めであり、愛である」（『愛の科学』一九二頁）。

ティヤールと同じく、賀川にとって、宇宙は進化する宇宙であり、意識化する宇宙の中で、人間の意識の目ざめこそ宗教である。

「進化せんとする宇宙の意志は人間を貫ぬいて進化せねばならない。そして宗教とは、この宇宙意志と自分の関係を、明確に決めて、宇宙意志の進化の方向に、自分が誤らざる道を辿ることにある」（『暗中叢語』全集22、九一頁）。

神は宇宙の創造者であるのみならず、宇宙の維持者であり、宇宙の進化者である。

「神が生命として、内と外に充ち満つる絶対の価値の創造者であり、維持者であり、進化者であることを知ることによって、初めて迷わざることが出来る」（前掲書、七三頁）。

賀川において、宇宙の進化を推進する力は、ティヤールにおいてと同じくキリストである。

「宇宙の修繕者キリストがその一つ一つに苦勞していられると思うと、天父の設計の有難いことに頭が下る。宇宙の修繕だけでなく、宇宙進化の段取りも、神の子がするのだと思えば容易ではない」（『統・空の鳥に養われて』全集24、五四〇頁）。

賀川豊彦こそはティヤール・ド・シャルダンに比すべき、現代日本の宇宙的宗教思想家のひとりと考えられるのである。

ティヤールの引用は『ティヤール・ド・シャルダン著作集全10巻』み

すす書房、賀川の引用は『賀川豊彦全集24巻』キリスト新聞社による。

(1) 拙稿『宇宙意識の宗教性—ビエール・ティヤール・ド・シャルダンと賀川豊彦—』『声』一九七〇年一月、R・H・ドランド博士による英訳は『The Religious Aspects of Cosmic Consciousness—A Comparison of Pierre Teilhard de Chardin and Teilhard de Chardin, Christian Century, Dec. 23, 1970, Chicago. 参照。』

最近のものとしては、『宇宙感覚の宗教性—ビエール・ティヤール・ド・シャルダンと賀川豊彦の宗教思想についての比較研究試論1, 2』ノートルダム清心女子大学紀要文化学編第九巻第一号及び第十巻第一号、一九八五—一九八六参照。

(2) C・キエノの著作以外、ティヤールの宇宙的宗教思想の理解のために次のものが有益である。

Emile Rideau, *La pensée du Père Teilhard de Chardin*, Editions du Seuil, Paris, 1965.

Henri de Lubac, s.j., *La pensée religieuse du Père Teilhard de Chardin*, Aubier, 1962.

N・ウィルティールス、美田稔訳『科学と信仰・ティヤール・ド・シャルダン』第三文明社、一九八一年。

(3) 拙稿『聖トマス・アキナスにおける魂の不滅と永生について』『サビエンチア』英知大学論叢第16号、昭和五七年、三四—四四頁参照。

(4) 賀川は「自然詩人」であるよりも、むしろ「生活詩人」であったと言われている。武藤富男、解説、全集20、四五—四四頁参照。

(5) 賀川は水の持つ「合目的性」に注目し、「ヘンダーソンの『自然環境の適合性』梶原三郎訳を高く評価し、また、岩石の持つ「合目的性」に関心を示し、W・J・ヴェルナドスキーの『地球化学』を高く評価した。彼の岩石への特別な関心は合目的性のためであったと考えられる。『宇宙の目的』全集13、三四—三五七頁参照。

(6) 昭和三四年十二月、賀川を病床に見舞った日野原重明氏は賀川の書齋に、オスラー『内科書』改訂版16版（一九四七年（昭和二年））を見つけた驚いたこと、賀川からこの本に署名して贈られたことについて、この本は貴重な書物でありながら、当時は日本のどの医学図書館にもなかった本を賀川が所有し読んでいたこと、賀川を科学者と呼んでいる。日野原重明『死をどう生きたか 私の中に残る人びと』中公新書、昭和五八年、八七—九七頁参照。

(7) 拙稿『宇宙の目的理解のために』賀川豊彦研究、第11号、第12号、第13号、一九八七年参照。

(8) 賀川は生涯の課題として、「宇宙悪とその救済」を追求し、偶然には変転のすれで、悪の存在の必然性を認めると同時に、宇宙に目的を認めることによって、その救済、すなわち「修繕」の原理を主張した。それ故、すべての人に人生のやり直しの出来ることが彼の福音理解である。イエスは宇宙の修繕者、宇宙進化の顕現である。賀川は修繕の原理を人体における白血球の役割にたとえた。

「宇宙の法則中に……一つの補償作用がある。宇宙意志の裡に……苦痛を癒さんとする法則が実在する（『イエスの宗教とその真理』全集1、一九一頁）。

「宇宙に大きな秘密がある。私が弱者貧民のために生命を棄てる其中に私は一つの宗教を発見したのである。十字架の精神——……即ちイエスは単に宇宙悪に対しての挑戦者であったのみでなくして、苦しめる者は纏帯し、痛める者を癒す人格的白血球運動者として自らの使命を自覚せられたのであった（前掲書、一九二頁）。

賀川の社会活動もすべて彼の進化論的宇宙思想に裏打ちされた彼の福音理解に基づくものである。

(きし・ひでし、神学、英知大学教授)